

## 第1章 歴史的仮名遣ひ

### 1. 日本語の文字と読み方

※日本語の文字のうち、音声を表しているのは仮名（ひらがな・カタカナ）である。

→仮名のことを「表音文字」といい、漢字のことを「表語文字」という。

※仮名の一覧表として五十音図がよく用いられる。

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
(ゐ)	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
(ゑ)	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

※上の五十音図は国語の授業で一般的なものである（「ん」を除く）。下の五十音図と比べてみよう。

<u>わ</u>	ら	や	や	ま	<u>は</u>	は	な		た	さ	か		あ
	り			み		ひ	に		ち	し	き	<u>い</u>	い
	る	ゆ	ゆ	む		ふ	ぬ	っ	つ	す	く	<u>う</u>	う
	れ			め	<u>へ</u>	へ	ね		て	せ	け		<u>え</u>
<u>を</u>	ろ	よ	よ	も		ほ	の		と	そ	こ		<u>お</u>

※次にローマ字の五十音図を見てみよう。

wa	ra	ya	ma	ha	na	ta	sa	ka	a
(wi)	ri		mi	hi	ni	ti	si	ki	i
	ru	yu	mu	hu	nu	tu	su	ku	u
(wo)	re		me	he	ne	te	se	ke	e
wo	ro	yo	mo	ho	no	to	so	ko	o

※上のローマ字は訓令式と呼ばれるものである。下のヘボン式と比べてみよう。

wa	ra	ya	ma	ha	na	ta	sa	ka	a
	ri		mi	hi	ni	chi	shi	ki	i
	ru	yu	mu	fu	nu	tsu	su	ku	u
	re		me	he	ne	te	se	ke	e
o	ro	yo	mo	ho	no	to	so	ko	o

※次に「濁音」「半濁音」と呼ばれるものを見てみよう。

ば	び	だ	ぢ	が
び	び	ぢ	ぢ	ぎ
ぶ	ぶ	づ	ず	ぐ
べ	べ	で	ぜ	げ
ぼ	ぼ	ど	ぞ	ご

※これをローマ字で見てみよう。左が訓令式で右がヘボン式である。

pa	ba	da	za	ga
pi	bi	di	zi	gi
pu	bu	du	zu	gu
pe	be	de	ze	ge
po	bo	do	zo	go

pa	ba	da	za	ga
pi	bi	ji	ji	gi
pu	bu	zu	zu	gu
pe	be	de	ze	ge
po	bo	do	zo	go

## 2. 母音と子音

### 2.1. 母音・子音とローマ文字

母音：息が口の中で妨げられずに発せられる音

子音：息が口の中で妨げられることによって生じる音

※ローマ文字は英語をはじめとする欧米の言語で用いられる文字で、表音文字の一種である。

→ローマ文字は「母音字」と「子音字」に分けられる。

→母音字とは母音を表す文字で子音字は子音を表す文字である。

母音字	子音字				
A a	B b	C c	D d		
E e	F f	G g	H h		
I i	J j	K k	L l	M m	N n
O o	P p	Q q	R r	S s	T t
U u	V v	W w	X x	Y y	Z z

### 2.2. 母音・子音と五十音図

※日本語の仮名は「子音+母音」という音の組み合わせを表す。

→「あ・い・う・え・お」はそれぞれ母音だけを表す。

→「ん」は例外で母音を含まない。

※母音を含む音のまとまりを「音節」という。

→日本語の音節は「子音+母音」が基本である。

→仮名1字は1つの音節を表している。

※子音には無声子音と有声子音がある。

→無声子音と有声子音をローマ字の場合は、kとgやtとdのようにまったく別の文字で表す。

→仮名では肩に2つの点(濁点)を加えることで有声子音であることを示す仕組みになっている。

→濁点を付けることができない仮名は、その子音がもともとから有声子音であり、対応する無声子音がないことを表している。

→有声子音を濁点で書き分けることは、室町時代の終わりに定着してきたとされている。

五十音図で同じ子音を共有する列 「行」

五十音図で同じ母音を共有する列 「段」

※「かきくけこ」は「カ行」、「いきしちにひみいりぬ」は「イ段」である。

→一般に、段は「あいうえお」、行は「あかさたなはまやらわ」の順に並べる。

→「ん」以外の文字は47しかないが、5つの段と10の行で $5 \times 10 = 50$ となるので「五十音」と言われる。

## 3. 歴史的仮名遣い

### 3.1. 歴史的仮名遣いによる五十音図

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

※仮名を10世紀末頃までの発音通りに書き表す方法を「歴史的仮名遣い」という。

→古文を読むときには歴史的仮名遣いを、より現代語に近い江戸時代の読み方で読むことになっている。  
→このため、文字と読み方が一対一で対応しないところがある。

### 3.2. 「ゐ」「ゑ」

※ワ行には、「ゐ」と「ゑ」という現代では使われていない字が含まれている。  
→これらはもともと「い」や「え」とは別の音を表していた。  
→鎌倉時代初頭の1200年頃に「い」「え」と同じ音を表すようになった。

「ゐ」	wi	→	i	(1200年頃)
「ゑ」	we	→	e	(1200年頃)

### 3.3. 「を」

「を」	wo	→	o	(1000年頃)
-----	----	---	---	----------

※「を」はwoのような音を表していた。  
→1000年頃に「お」と同じ音に変化した。  
→「を」は現代でも助詞を表記するときを使うので残っている。

### 3.4. 「い」「う」

※ア行の「い」とヤ行の「い」、ア行の「う」とワ行の「う」は、それぞれ同じ音を表している。

### 3.5. 「え」

ヤ行の「え」	ye	→	e	(10世紀頃)
--------	----	---	---	---------

※ヤ行の「え」(ye)とア行の「え」(e)は10世紀中頃に同じ音に変化し、現行の仮名でもア行の「え」とヤ行の「え」を文字の上で区別することはできない。  
→10世紀の時点で区別できない音は、仮名では表し分けない。

## 4. 発音の変化

### 4.1. ハ行転呼

※語中の「わいうえお」が、歴史的仮名遣いでは「はひふへほ」で書き表されることがある。

かは(川)、かほ(顔)、いは(岩)、こひ(恋)、ぬふ(縫ふ)、いへ(家)、こほり(氷)

※これらの後の第2音節は、古くはハ行で発音されていた。

→これが10世紀の終わりごろに語頭以外のハ行音がすべてワ行音に変わっていった。

→このため、それ以降の日本語では語中の「はひふへほ」が「わゐうゑを」、さらにその後に「わいうえお」と発音されるようになった。この発音の変化を「ハ行転呼」と呼ぶ。

※現代日本語では、外来語を除いて単語の内部に「はひふへほ」が出てくることは原則としてない。

→「あひる」「あふれる」「あさはか」「そこはかと」「はなはだ」「はは」など、例外はごくわずかである。

### 4.2. 連母音から単母音へ

※室町時代に連母音から単母音への変化が起こった。

#### ★au→o

あう(アウ→オー)、かう(カウ→コー)、さう(サウ→ソー)、たう(タウ→トー)、なう(ナウ→ノー)、まう(マウ→モー)、やう(ヤウ→ヨー)、らう(ラウ→ロー)、わう(ワウ→オー)

きやう(キャウ→キョー)、しやう(しゃう→ショー)、ちやう(チャウ→チョー)、にやう(ニャウ→ニョー)、ひやう(ヒャウ→ヒョー)、みやう(ミャウ→ミョー)、りやう(リャウ→リョー)

★ou→o

こう(コウ→コー)、そう(ソウ→ソー)、とう(トウ→トー)、のう(ノウ→ノー)、ほう(ホウ→ホー)、もう(モウ→モー)、よう(ヨウ→ヨー)、どう(ロウ→ロー)

きよう(キョウ→キョー)、しよう(ショウ→ショー)、ちよう(チョウ→チョー)、によう(ニョウ→ニョー)、ひよう(ヒョウ→ヒョー)

★eu→jo:

えう(エウ→ヨー)、けう(ケウ→キョー)、せう(セウ→ショー)、てう(テウ→チョー)、ねう(ネウ→ニョー)、へう(ヘウ→ヒョー)、めう(メウ→ミョー)、れう(レウ→リョー)

4.3. ハ行転呼と短母音化

語頭以外の「はひふへほ」	(ha hi hu he ho)
→「わみうゑを」	(wa wi u we wo) (平安時代後期(院政期))
→「わいうえお」	(wa i u e o) (鎌倉時代初期)

※語中のハ行音は、鎌倉時代の初期までに「は」(ha→wa)以外は子音(半母音)が消失した。

→このため、室町時代の終わりには表記と発音との間に大きな隔たりが生じるようになった。

あふ(アフ→アウ→オー)、かふ(カフ→カウ→コー)  
おふ(オフ→オウ→オー)、こふ(コフ→コウ→コー)、そふ(ソフ→ソウ→ソー)、むこふ(ムコフ→ムコウ→ムコ一)、おもふ(オモフ→オモウ→オモー)  
ゑふ(エフ→エウ→ヨー)、てふてふ(テフテフ→テウテウ→チョーチョー)